

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：32519

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12111

研究課題名（和文）AIDで生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究

研究課題名（英文）Creating teaching materials to guarantee the right to know the origin of AID children

研究代表者

清水 清美（shimizu, kiyomi）

城西国際大学・看護学部・教授

研究者番号：70323673

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は提供精子で親になった人が、AID子とこの事実について共有（Telling）するための教材作成を目的とした。Tellingに関する情報を収集するため、ニュージーランドおよび国内のtellingに関する実態調査を行った。教材（冊子）の表題は「私たちが大切にしたいもの AIDで家族になった人たちの告知への思いと実践」とし、前半にはAID親の体験を、後半には生まれた人からのメッセージや専門家からの情報を掲載した。関係機関に配布し、治療施設からは「患者の教材として活用できる」「自分たちの患者理解に役立った」、不妊当事者からは「告知を前向きに考えてみようと思う」等、評価を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成した冊子「私たちが大切にしたいもの AIDで家族になった人たちの告知への思いと実践」は、AIDで親になることを検討している人が、「生まれた人の出自を知る権利」の保障にどのように関わればよいのか自ら考えるための一教材となる。本冊子は、GID（性同一性障害）のカップルやレズビアン、シングル女性など多様化する家族形成を検討している人にも活用できる。また、本技術を用いた家族について国民から理解を得るための基礎資料になると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to create teaching materials for those who became parents by donated sperm to tell about this fact with AID children. To gather information about telling, we surveyed New Zealand telling's actual and domestic AID parent's perceptions of telling.

The teaching materials (booklets) are based on the experiences of Japanese AID parents. In the first half of the booklet, the experiences of AID parents were posted, and in the second half, messages from the born people and researchers were posted. We made 500 volumes of teaching materials and distributed them to the sperm implementation facilities, counselors and nurses, and infertility self-help groups. This booklet was evaluated as "useful as a teaching material for patients", "Help us understand patients" by treatment facilities, and "thinking positive telling" by infertility parties.

研究分野：看護学・助産学

キーワード：情報提供教材 不妊カップル 提供精子 出自を知る権利

1. 研究開始当初の背景

非配偶者間人工授精（以下 AID とする）で生まれた人の「出自を知る権利」の保障は、親から出生に関する事実について説明を受け共有すること（以下 Telling とする）と精子提供者が特定できる情報があってはじめて成立する。わが国で実施してきた匿名精子の利用、そしてこの事実を秘密にする体制は、意図的でないにして、「生まれた人の出自を知る権利」を行使できないという構造をつくりだしてきた。昨今、AID で生まれた人から出自について秘密にされることの弊害について問題提起され¹⁻³⁾、AID 実施施設の医療者は、親になることを検討している人やドナー候補者に生まれた子への Telling の重要性について伝えるようになった⁴⁾。

一方、AID を選択した人の意識調査では、約 8 割の男女が AID で出生した事実について子どもに告げる予定はなく、夫婦だけの秘密にしたいと考えていた⁵⁾。親の「告げない」主な理由には、「二人の子どもにかわりない」「親子・家族崩壊の危険がある」「現行では提供者を知ることができず、出生の事実だけ知ることは酷だ」があった。DC ネットワークの創設メンバーである Montuschi 氏は、親自身 AID を利用した家族づくりをしばしば「恥ずべきこと」「スティグマ」として捉える傾向は根強く、その場合 Telling の実施は困難を伴うと述べている⁶⁾。親の根底にある AID に対するネガティブなイメージや不安や懸念に寄り添う情報提供は重要だと考える。なお、本報告では、AID を検討している人・AID で親になった人を AID 親、AID で出生した人を AID 子とする。

2. 研究の目的

本研究では AID 親が、彼らの抱く AID に対するネガティブなイメージや懸念を軽減し、AID 子の「出自を知る権利」の保障について理解し、検討するための教材作成を目指す。そのため、教材の基礎情報となる以下の調査を実施する。

【研究 1】ニュージーランドにおける Telling の実態を明らかにする

【研究 2】我が国の AID 親の Telling に関する認識について明らかにする

【研究 3】国内（日本人）の AID 親の体験を収集し教材を作成・配送する

3. 研究の方法

【研究 1】ニュージーランドにおける Telling の実態を明らかにする

- 1) 対象：AID 親および AID 子
- 2) 調査内容：AID 親および AID 子の Telling に対する認識
- 3) 調査方法：対象者は第 3 者の生殖医療に関する研究の第一人者であるニュージーランド カンタベリー大学のダニエルズ氏より紹介いただきインタビューガイドを作成しインタビューを実施した。
- 4) 倫理的配慮：事前に研究の目的を説明、承諾を得て実施した。また、城西国際大学看護学部倫理委員会の承認を得た。

【研究 2】国内の AID 親の Telling に関する認識について明らかにする

- 1) 対象：国内で「AID で生まれた人の出自を知る権利」について事前に学んだ AID 親
- 2) 調査内容：国内の AID 親の自助グループの承諾を得て、Telling の実施状況、Telling を実施した理由、Telling を実施していない理由、Telling の方法、精子提供者に求める情報開示、社会に求める支援活動など。
- 3) 調査方法：アンケート調査を作成、実施した。
- 4) 倫理的配慮：事前に研究の目的および参加の有無は自由意志であることを紙面と口頭にて説明、アンケートの回答をもって承諾を得たとした。また、城西国際大学看護学部倫理委員会の承認を得た。

【研究3】国内（日本人）のAID親の体験を収集し教材を作成・配送・評価を受ける

- 1) 協力者：国内（日本人）のAID親
 - 2) 収集方法：国内のAID親の自助グループの承諾を得て、教材作成を目的にAID実施体験およびAID子へのTelling体験を募集した。
 - 3) 倫理的配慮：教材作成の目的および活用方法、参加の有無は自由意志であること、一度参加の意思を示しても途中で撤回が可能であることを紙面と口頭にて説明、同意が得られた人とは同意書を交わした。協力者のプライバシー保護を目的に、協力者の氏名および体験談に表記された個人名については著者の同意を得て匿名とした。
4. 研究成果

【研究1】ニュージーランドにおけるTellingの実態（Tellingを実施したAID親およびTellingをうけたAID子のTellingに対する認識）

ニュージーランドでは2005年「ヒト生殖補助法」が開始され、提供配偶子による生殖補助医療で出生した人の出自に関する情報のアクセス権が認められるようになった。AID親は、法の制定以前（匿名精子）でありながら、生まれた子にTellingを実践した親5名（A夫妻・B夫妻・C妻）であった。3組とも親がオープンであること、早期からの告知は子も素直に受け入れてくれ、大きな問題はないと述べた。

表1 AID親：Tellingに対する認識および実施した時期・AID子の反応について

	Tellingに対する認識	時期・AID子の反応	その他
A夫妻 AID男児2 児・女児1児 の親	家族に嘘があってはならない、家族は信頼関係で結ばれているべき。子どもたちが出生の事実を、自分たちの親からだけでなく、他の人から知られることがあってはならない。また、同時に子どもたちには自分が打ち明けたいと思う人に話す権利がある。	子どもから知りたいと言いつつ話そうと思っていた。長男が4歳の時、養子に関する番組をみて父親に「お父さんは僕のお父さん？」と尋ねてきたので絵本（My Story）を使って説明した。長男は知的好奇心が高く、初めてのtelling後「精子って何？」「どうやって受精するの？」等の質問があり、その都度、大人に話す言葉で彼が満足するまで説明した。事実を理解することで他の子どもにからかわれた時にも防御する力となるだろうと考えたからだ。下の弟妹は長男からどうやって赤ちゃんができるのか、染色体や遺伝子について完璧な説明をしており、兄弟同士で理解を深めていると感じた。	子どもだけでなく、子どもや家族がかかわる、親類、親しい友人、ベビーシッター等にもオープンであること。また、ドナーが分からなくても子どもには事実を伝え、もしドナーが知りたければ支援する姿勢を持つこと。
B夫妻 実子2児と AID男児の親	次男のみAID児であったので、他の兄弟との隔たりを感じてほしくなかった。親から伝えるのではなく子ども自身で知ってしまうことは避けたい。子どもにも事実を隠しておくことは難しい、子どもには事実を知ってもらいたいと思った。	次男が5歳の時に、兄弟3人に同時に次男のAIDの事実を話した。次男の受精方法は2人と異なるが、みんな両親にとってとても特別な存在で、とても愛していると話した。その後、思春期・婚約した時など人生の節目にはドナー情報を知りたいか確認したが、彼は今の家族といっただけで幸せて、提供者については知りたくないし、かわりを持とうと思っていないと言っていた。現在、次男に婚約者がいるが、彼から婚約者にAIDで生まれていることを伝えており、彼女も了解している。	良好な夫婦関係を保つための秘訣として、妻は夫婦は同じ土俵にいて、同じことを望み、同じ道を歩いている必要がある。
C妻 AID女児の親	大人になって養子であることを告げられた叔母が大変な様子だったので、きちんと知っている方が健全だと思った。常にオープンでいることが安定した家族関係をつくる。	早期からTellingしようと、AIDについて説明するための絵本を与えた。話の前後で娘の変化は特になかった。夫を父親としっかり認識していた。ドナーが分からなくても怒ったりいら立つことはなかった。18歳になり、ドナーのことがきちんと知りたいなら知ることができると伝えたが、興味がなさそうだった。ただ、デートする相手には（近親婚にならないように）気を付けるように言っている。	夫婦・親子がオープンであること。身近な人にも事実を知ってもらい、子ども支えてもらうこと。そのうえで、自然な家族になるだろうと感じている。

面会できたAID子は5名だが、時間の関係上詳細をインタビューできなかった1名を除き4名について報告する。オープンなコミュニケーションが取れている家庭における早期からのTellingは、子の人

生に大きく変化をもたらさず、そのユニークさに誇りを感じる者もいた。一方、夫婦間の意見が一致しないなかでの Telling の実施は様々な問題をはらむことが推察された。また、同じ兄弟姉妹でありながらドナーや異母兄弟姉妹への関心の持ち方は異なり、知る権利と知らないでいる権利の拮抗なども起こることが予測された。

表2 AID子：Telling時の状況その時の思い、その後の生活に及ぼした影響、Telling に対する認識

	Telling時の状況・その時の思い	その後の生活に及ぼした影響	Tellingに対する認識
20代 女性 (2児の母)	自分が18歳、弟が15歳の時、AIDで生まれたことを父親と同席のもと母親から聞いた（この時両親は離婚し母は再婚していた）。母親は以前から告知したいと考えていったが親子関係に影響が出ることを恐れた父親が拒否していたという。Tellingを受けた時、自分が誰であるか見失う感覚、時間が止まったような感覚（アイデンティティロス）があった。また、父親がマオリ族の血を引いているので、そうした文化的遺産を失った感覚もあった。私たちの背景を継父はすでに知っていて、母親に裏切られた怒りの感覚もあった。「知らなければよかった」と弟と話した。	その後、気持ちの変化があり、大学を退学し、家を出て、しばらくは男性と過ごした。AIDで生まれたことを受け入れるのに1年から1年半かかった。弟は父と仲が良かったので父が心を痛めているのを見て強い反感を持ち、このことだけが原因でないが、ドラッグや飲酒の問題を抱えるようになった。その後、弟もこの事実を受け入れたようだが、この件について弟と話すことはない。幼い頃から何か違う気がして、この事実を知って腑に落ちるようになった。クリニックからドナーが見つかったという連絡を受けて面会したが、ドナーはコミュニケーションに問題がありそのことに少しがっかりした。	このような経験をしたが、自分のアイデンティティに関わることで、AIDで生まれたことを知ってよかった。異母姉妹とは良好な関係を望んでいる。
40代 男性	17歳の時にDIで生まれたことを母親より聞いた（父親は彼が10歳の時に自殺している）。母親は常にオープンにしたがっていたが、父方は非常に血筋を大切にしているオープンにすることをためらっていた。その後父の死でショックを受けていたので、母はTellingを控えていたが、ファミリードクターから事実を伝えるように促されたようである。	21歳になって父親がなぜ自殺したのか理解するために調べ、父の遺書にたどりついた。父の遺書から「将来が見えず、AIDで子どもが生まれた事実が表に出ることを恐れていたということを知った」。同じドナーで生まれた兄はドナーにまったく興味を持たず、AIDについても話しながらない。AID子の自助グループ作りを計画している。	自分は絶えずAID・ドナーのことを考え、知りたいと思っている。
20代 女性 学生	記憶にある限りDIで生まれたことを知っていたが、3歳くらいの時に、母親に絵本「私はどこから来たの？」という絵本を読んでもらったことを覚えている。	AIDで生まれた子とはとてもユニークなことであり誇りに思っている。気が合う仲間にも伝えてきた。AIDで生まれたことを話しても否定的な反応を受けたことはない。ドナー情報を得られる年齢（18歳）になったが、両親とも強い絆で結ばれておりドナーは私にとって影のような存在。父とは血が繋がっていても、彼が自分の父だということに疑問の余地はない。将来ドナーについて知りたくなっても父に疎外感などを一切感じてほしくない。	DIで生まれたことを早い時点で伝えてくれた両親に感謝している。
20代 女性 学生	7歳の時に双子の姉と一緒に親からTellingを受けた。話を聞いた後、姉とそのことについて少し話したが彼女はあまり興味を示さなかった。	ドナーや異母兄弟姉妹について興味があり、17歳の時に医師に連絡を取って情報を入手するためのプロセスを聞いた。最近になり、5人の異母兄弟姉妹が見つかった。そのうち1名の写真をみて自分と似ていると思った。両親は私の活動を支援してくれている。上記男性とAID子の自助グループ作りを計画している。	ドナーと連絡が取れたとしてもいろいろなことを望んでいるわけではなく、知ることで落ち着きたいと思っている

【研究2】国内のAID親のTellingに関する認識（「AID生まれた人の出自を知る権利」について事前に学んだAID親の認識）

対象は女性25名、男性22名。【生まれた子へのTelling】については「実施した（予定している）」が男性21名（95.5%）・女性20名（80.0%）だった。主な理由に、「何も恥じることでない」「ドナーへの感謝も含めて話すつもり」があった。Tellingに反対する意見も男女1名ずつあり、主な理由は「これでドナーが減るとなると困る」だった。【提供者の情報開示をどこまで求めるか】については、「個人が特定できる情報（名前・住所・写真等）」男性13名（51.9%）・女性15名（60.0%）、「個人が特定できない情報（性格・趣味・医療情報）」男性3名（13.6%）・女性5名（28.0%）、「近親婚を避けるための情報」男性3名（13.6%）・女性2名（8%）だった。非匿名の情報を求める主な理由には「子どもが望んだとき

に、ドナーを知ることができる法整備は急務」「ドナーの気持ち、子どもの気持ち両方を尊重した対応を望む」、匿名の情報を求める主な理由には「少なくとも医療情報や近親婚を防止する制度を作してほしい」があった。

【研究 3】国内の AID 体験を主として教材を作成・配送・評価を受ける。

13 事例を収集した。13 事例の内 2 事例は国外に在住または在住中に AID を実施しており、精子バンクやクリニックを通じて非匿名の提供精子（オープンドナー）を選択していた。Telling を開始している人は 8 名だった。Telling を開始した理由は、「AID と告知はセット」「親は子どもの気持ちや未来に正直に向き合っていくべき」「子どもたちが自身の出自を受け入れられるようにしたい」「告知をしたうえでできる限り子どもを支えていきたい」等があった。初めての Telling 時の子の年齢は、2-4 歳で、方法は「絵本や紙芝居など教材を用いている」3 名、「自分の言葉で話している」3 名だった。その後の telling は、「ことあるごとに話題に出す」「お誕生日など家族の大切な日に話す」だった。オープンドナーを選択した 2 名のうち、1 名は AID 実施施設の協力を得て子（出生者）とドナー間で手紙のやりとりが開始していた。また、1 名は NPO（Donor Sibling Registry）のサイトで同じドナーから生まれた異母兄弟が見つかり親同士の交流が始まっていた。

上記調査を整理し、AID 体験者の手記がほとんどないわが国において、体験者の情報は重要だと考え、教材冊子の前半に Telling を含めた親の体験記（国内）を、後半に AID で生まれた人からのメッセージ、専門家（研究者・医師・社会福祉士・看護師）からの情報提供を掲載し冊子（総ページ 160）を作成した。教材は、提供精子実施施設、カウンセラーや看護師、不妊自助グループに配布した。後日、冊子を受け取った治療施設からは「精子提供を希望する患者に貸し出したい」「倫理委員やフォローアップ委員の資料として活用したい」と、冊子の追加依頼があった。また、カウンセラーや看護師からは「男性不妊や精子提供を体験する当事者の貴重な体験を知ることができた」「卵子提供を希望する患者にも活用できる」等、患者理解や相談活用に役立つこと、不妊当事者からは「告知に対するイメージが変わった」「告知を前向きに考えてみようと思う」等、telling への認識に変化があったと報告があった。

今後は、今回作成した教材が、親の根底にある AID に対するネガティブなイメージや不安・懸念に寄り添う情報提供となっているか、検証していく必要があると考える。

- 1) 非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ・長沖暁子（2014）. 萬書房
- 2) 第三者の関わる生殖技術に STOP（2010）. 第三者の関わる生殖技術について考える会活動報告集, 第三者の関わる生殖技術について考える会
- 3) 長沖暁子（2009）. 非配偶者間人工授精（AID）で生まれた子どもたちが語り始めたインパクション 169, インパクト出版会, 18-21
- 4) 精子・卵子の提供による非配偶者間体外受精に関する JISART ガイドライン（2010）. 日本生殖補助医療標準化機関 <https://jisart.jp/about/external/guidline/>（2020 年 5 月 30 日アクセス）
- 5) 清水清美・日下和代・長沖暁子（2007）. 非配偶者間人工授精を選択した女性の体験 日本生殖看護学会誌 4(1), 16-25
- 6) Olivia Montuschi（2006）. Telling and Talking about Donor Conception with 0-7 year olds A Guide for Parents, Donor Conception Network, 1-15

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 仙波由加里	4. 巻 30
2. 論文標題 どのような人が理想の配偶子ドナーとなりうるか-ニュージーランドと英国のドナーたちの経験から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生命倫理	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅谷 典恵, 清水 清美	4. 巻 4
2. 論文標題 AIDを検討する夫婦にカウンセリングを実施する意義とその課題 実施後のアンケート調査から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本生殖心理学会誌	6. 最初と最後の頁 29-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 清美, 森 明子, 菅野 伸俊	4. 巻 15
2. 論文標題 不妊症外来における不妊相談体制の調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本生殖看護学会誌	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水清美, 日下和代	4. 巻 14
2. 論文標題 非配偶者間人工授精を検討している不妊夫婦を対象とした準備セミナーの評価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本生殖看護学会誌	6. 最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仙波由加里, 清水清美, 久慈直昭	4. 巻 14
2. 論文標題 日本の精子ドナーの視点による匿名性の問題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本生殖看護学会誌	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Marilyn Crawshaw, Yukari Semba, et. al,	4. 巻 32
2. 論文標題 Disclosure and donor-conceived children	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Human Reproduction	6. 最初と最後の頁 1535-1536
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 仙波由加里、清水清美、久慈直昭	4. 巻 27
2. 論文標題 精子ドナーの匿名性をめぐる問題 遺伝子検査の時代に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 生命倫理	6. 最初と最後の頁 105-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 清水清美
2. 発表標題 提供精子により形成された家族の課題
3. 学会等名 第17回 日本生殖心理学会 シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水清美
2. 発表標題 精子提供を希望する夫婦、精子提供でできた家族を支える
3. 学会等名 日本生殖心理学会 生殖医療相談士 継続研修会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水清美
2. 発表標題 AIDにかかわる当事者支援
3. 学会等名 日本生殖心理学会 生殖医療相談士 養成講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 仙波由加里
2. 発表標題 What can Japan learn from the Experience of Victoria State, Australia and New Zealand
3. 学会等名 New Reproductive Technologies and Global Assemblages :Asian Comparative Rerspective（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 仙波由加里
2. 発表標題 「子どもに伝える」研究者の立場から
3. 学会等名 第42回 すまいる勉強会 子どもに伝えるシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久慈直昭
2. 発表標題 「子どもに伝える」医師の立場から
3. 学会等名 第42回 すまいる勉強会 子どもに伝えるシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水澤 友利, 久慈 直昭, 塩谷 雅英
2. 発表標題 ドイツにおけるAID治療に関する精子提供者登録法(Samenspendenregistergesetz: SaRegG)についての検討と考察
3. 学会等名 日本生殖医学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久慈 直昭
2. 発表標題 生殖医療の医療安全
3. 学会等名 日本卵子学会誌
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水清美
2. 発表標題 提供精子を用いた人工授精（AID）を選択した親のニーズ
3. 学会等名 第16回 日本生殖心理学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naoaki Kuji
2. 発表標題 Japanese Situation of Therapeutic Donor Insemination
3. 学会等名 16th Asia Pacific Society for Sexual Medicine (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 水澤友利, 久慈直昭, Daniels Ken, 塩谷雅英
2. 発表標題 ニュージーランドにおける第三者を介する生殖補助医療治療の現状と問題点
3. 学会等名 第62回 日本生殖医学会学術講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 仙波由香里, 清水清美, 久慈直昭
2. 発表標題 精子ドナーの匿名性をめぐる問題 諸外国の状況を踏まえて
3. 学会等名 第28回 日本生命倫理学会年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水清美, 仙波由香里, , 久慈直昭
2. 発表標題 AID児へのtellingを前向きに検討・実施している親の課題およびニーズ
3. 学会等名 第14回 日本生殖心理学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 久慈直昭
2. 発表標題 医師から見た各国のAID事情～ドイツ・イギリス・ベルギー等の状況
3. 学会等名 お茶の水女子大学IGSセミナー（生殖領域）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 仙波由加里
2. 発表標題 AID出生者のドナー情報を得る権利 英国・オランダ・ドイツ・アメリカの状況
3. 学会等名 お茶の水女子大学IGSセミナー（生殖領域）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 清水清美
2. 発表標題 AIDで親になった人の思い
3. 学会等名 お茶の水女子大学IGSセミナー（生殖領域）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計17件

1. 著者名 清水清美, 仙波由加里, 久慈直昭	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社プライム・オリジンズ	5. 総ページ数 160
3. 書名 私たちが大切にしたいもの AIDで家族になった人たちへの告知への思いと実践	

1. 著者名 仙波由加里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人間と歴史社	5. 総ページ数 142
3. 書名 血のつながりをこえて 提供精子・提供卵子・養子でできた家族の物語	

1. 著者名 久慈直昭	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本医師会	5. 総ページ数 5
3. 書名 女性不妊症の標準的治療 (特集 不妊症・不育症の標準的治療と先端技術の課題)	

1. 著者名 仙波由加里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 南江堂	5. 総ページ数 19
3. 書名 薬学人のための事例で学ぶ倫理学	

1. 著者名 久慈直昭	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中外医学社	5. 総ページ数 5
3. 書名 不妊症・不育症診療	

1. 著者名 仙波由加里	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 10
3. 書名 今を生きるための倫理学	

1. 著者名 久慈直昭, 伊東宏絵, 西洋孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 3
3. 書名 不妊治療Q&A	

1. 著者名 久慈直昭	4. 発行年 2019年
2. 出版社 徳島産婦人科医報52号	5. 総ページ数 1
3. 書名 精子提供による不妊治療	

1. 著者名 仙波由加里・清水清美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ホームスチール さくまいずみ	5. 総ページ数 30
3. 書名 提供配偶子で形成された家族に関する研究 ニューージーランド調査	

1. 著者名 仙波由加里	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本医学哲学・倫理学会	5. 総ページ数 4
3. 書名 ワークショップの概要 「正常さ」と「異常さ」の境界：「不幸な生」に関する倫理的背景の考察	

1. 著者名 久慈 直昭	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Journal of Clinical Rehabilitation	5. 総ページ数 446-452
3. 書名 生殖医療・妊孕性温存・出生前診断の今 生殖医療の変遷	

1. 著者名 浜谷 敏生, 小川 誠司, 久慈 直昭, 田中 守	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臨床婦人科産科	5. 総ページ数 163-166
3. 書名 産婦人科外来パーフェクトガイド-いまのトレンドを逃さずチェック!疾患編 不妊・不育《人工授精》 提供精子を用いた人工授精(AID)(解説/特集)	

1. 著者名 仙波由加里	4. 発行年 2018年
2. 出版社 お茶の水女子大学	5. 総ページ数 84
3. 書名 生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会	

1. 著者名 久慈直昭	4. 発行年 2017年
2. 出版社 医学のあゆみ	5. 総ページ数 5
3. 書名 生殖倫理の現況と展望(Vol.1) 日本における生殖医療の歴史 AIDを中心として	

1. 著者名 久慈 直昭	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ペリネイタルケア 36	5. 総ページ数 4
3. 書名 女性の年齢と妊孕性	

1. 著者名 水澤 友利, 久慈 直昭	4. 発行年 2017年
2. 出版社 臨床婦人科産科 71	5. 総ページ数 8
3. 書名 配偶子提供(性同一性障害を含む)	

1. 著者名 久慈直昭	4. 発行年 2016年
2. 出版社 日本女性法律家協会会報	5. 総ページ数 7
3. 書名 不妊症治療における配偶子提供とその問題点 (特集 生殖補助医療と人権)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	仙波 由加里 (semba yukari) (00565872)	お茶の水女子大学・ジェンダー研究所・特任リサーチフェ ロー (12611)	
研究 分 担 者	久慈 直昭 (kuji naoaki) (80169987)	東京医科大学・医学部・教授 (32645)	